

令和２年度 自己評価表			鳥取県立白兔養護学校	
中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて 努力する子どもの育成	白兔のあいうえお あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心	今年度の重点目標	・人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成 ・確かな学びにつながる学習指導の充実 ・児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ・知的障がい教育の専門性の向上・発揮

年 度 当 初						評価結果 () 月		
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標 (年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成	・地域との連携	小学部	○基本的生活習慣の確立をめざすことを中心に児童が主体的に活動する意欲と態度の育成に努めている。 ○対教師との関わりから児童同士の関わりに広がりつつある。	○児童が主体的に活動する姿や友達と積極的に関わったり、児童同士で支え合ったりする姿が見られる。	○的確な実態把握の仕方、児童の主体性を伸ばす支援や授業づくりについて学部会、学部研究会を通して共通理解を図る。 ○学部全体で児童の実態を共有し、一貫した支援・指導を行うことで児童の主体性や児童同士のつながりを育む。			
		中学部	○学習や生活の中で、生徒同士がお互いに助け合ったり、協力したりして、人と関わる楽しさや良さを感じつつある。 ○総合的な学習の時間を中心に、地域のもの・人・ことに興味・関心が広がりつつある。	○生徒が人と関わる楽しさや自己有能感を持ち、主体的に関わろうとしたり自分の思いを表現しようとしたりする姿が見られている。 ○生徒が、地域のものやことについて興味・関心を持ち、地域の方との交流を実施している。	○生徒が一つの目的を持って、協力しながら活動したり、自分の役割を果たしたりできるような学習の設定を行う。 ○総合的な学習の時間や各教科の学習の中で、生徒の実態に応じた地域とつながる活動を計画し、実施していく。			
		高等部	○卒業後に働き続けられるよう、自己理解（自己有用感・障がい理解）の深まりが必要である。	○生徒と保護者、学校が、適切な自己理解のもと、卒業後の働く姿をイメージしながら進路について考えている。	○適切な実態把握のもと、実習先や地域を巻き込んだ学習を展開していくことで、より適切な自己理解が図れるようにする。			
	・病院等の連携	訪問学級	○病院関係者（看護師、医療、リハビリ、療育等）と連携を取りながら安心安全な環境作りに向け、さらに連携を図る必要がある。	○児童生徒が安心安全に生活し、安定した状態で学習をしている。	○病棟看護師、理学療法士と特に連携を取り、申し受けやリハビリ懇談会で実態把握、共通理解をしながら支援の改善や充実を図る。			
		支援部	○居住地校交流、学校間交流などの交流及び共同学習が計画的に行われているが、関係する教職員や保護者以外にその成果等を伝えることが十分ではない。	○本校の交流及び共同学習の取り組みについて、その概要を教職員や保護者が知っている。	○「みんなのわ」を2回（年度途中、年度末）発行し、教職員・保護者に配付する。 ○学校だより、学部だよりで交流及び共同学習の様子を伝える。 ○ビデオレター等による交流のを工夫する。 ○相手校に「交流パンフレット」を活用してもらう。			
2 確かな学びにつながる学習指導の充実	・新学習指導要領に対応した授業研究	小学部	○新学習指導要領をもとに整理した年間指導計画をもとに実践を重ねている。	○新学習指導要領に対応した教育内容や支援方法の改善が図られている。	○年間指導計画を検証しながら、新学習指導要領、児童の実態にあった教育内容の改善（実態把握、単元構成、グループ編成、次年度の教育課程等）を図る。			
		中学部	○昨年度、新学習指導要領をもとに整理した年間指導計画（各教科）をもとにしながら実践を行っている。	○新学習指導要領に対応した教育内容の整理（生活単元学習・作業学習）や授業づくり（支援方法の改善等）が図られている。	○研究と関連させながら、新学習指導要領や生徒の実態に応じた学習内容の整理、授業づくりを行っている。			
		高等部	○卒業後の自立した生活に必要な基本的生活習慣が十分に定着していない。	○生徒と保護者、学校が、自立に向けて必要な力を共通理解し、その定着に努めている。	○普段の肯定的な関わり、連絡帳や電話等における関係づくりを進めていく中で、生徒、保護者との信頼関係を構築する。 ○基本的生活習慣における課題を明確にし、家庭と連携しながら定着に努める。 ○イメージする将来の姿や新学習指導要領をふまえ、教育内容の見直し（学習内容、次年度の教育課程等）を図る。			
	・ICT機器の活用	訪問学級	○ICT教育機器（視線入力、iPad、個に合ったアプリ等）を用いながら日々の学習を行っているが、個に合った様々な感覚を生かした学習に広げて工夫する必要がある。	○声、表情、体の動きや教育機器等で、気持ちを表出する意欲や場面が増える。	○実態に応じた様々な感覚を生かした環境の工夫を行い、学部内でアイデアを出し合い共通理解を図る。 ○教員間で児童生徒の反応について話し合う機会をもつ。			
			○新学習指導要領に対応して個別の指導計画の様式を変更したが、3観点の目標設定と評価の在り方について十分に浸透できていない。	○個別の指導計画の目標設定と評価が3観点を踏まえたものになり、どんな教科の力がついたか明確になっている。	○目標設定と評価の具体的な事例を取り上げた研修を行い、記入について分掌や各学部で確認し共通理解を図る。			

		教務部	○プログラミング教育についての理解が不十分で学習に活用されていない。	○生徒の実態に合ったプログラミング教育が学習の中に位置づけられている。	○プログラミング教育の視点での授業づくり研修会を実施し、学習の中で取り組めるプログラミング教育について学ぶ。			
2 確かな学びにつながる学習指導の充実	新学習指導要領に対応した授業研究 ・ I C T 機器の活用		○学校図書館利用や学習における資料の活用は増加傾向にあるが教科や場面が限定的であり、より幅広い学習場面での活用が望まれる。	○学校図書館や図書館資料を活用した学習を行う教科や領域等が増えている。	○図書館活用年間計画を活用し学習内容に合った資料を揃えたり、資料を使った学習方法を提案したりする。			
		キャリア教育部	○「児童生徒に付けたい力」を年間指導計画（各教科）に位置付けた。授業で活用しながら見直す必要がある。 ○昨年度実施した、卒業生が利用している障がい福祉サービス事業所等への聞き取り調査結果をまとめて、重度・重複の生徒がより重点的に取り組むべき内容について整理する必要がある。	○「児童生徒に付けたい力」が年間指導計画（各教科等を合わせた指導）に位置付けられ、授業実践をしながらカリキュラムマネジメント等に活用されている。	○「児童生徒に付けたい力」の学校としての位置づけを再確認し、活用できるように分掌間・学部間で共通理解を図る。 ○各ライフステージ及び実態に応じた学習内容や支援のあり方等について、「児童生徒に付けたい力」の視点から改善案等を検討する。			
		研究部	○「各教科等を合わせた指導」を中心とした、教育内容等の整理や見直しが必要である。 ○学習指導の評価・改善につながる仕組みの整備が必要である。	○「生活単元学習」「作業学習」の教育内容や指導計画の整理が行われている。 ○児童生徒の学習状況を把握し、評価・改善を通じた学習評価につながる仕組みが整備されている。	○全職員でグループ研究・学部研究を進めて、教育内容等の整理を行う。 ○児童生徒の学習状況の把握や学習評価につながる仕組みについて、他の分掌や学部と連携しながら協議や整備を行う。			
3 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進	・健康教育の推進	全学部	○児童の健康、安全面に留意した危機管理体制の整備に努めている。 ○新型コロナウイルス感染症予防に際し、児童生徒自らが身を守る意識を育むことが必要である。 ○「新しい生活様式」を取り入れた学校生活の見直しが必要である。	○児童の疾患や行動を把握し、児童の健康や安全に対する的確な対応、取組が行われている。 ○児童自身も自らの健康や安全への意識が高まってきている。 ○「三密」を避ける環境が整っている。	○学級担任や養護教諭と連携し、児童生徒の健康、安全の状況の把握する。緊急時の対応の仕方、マニュアルを学校全体に周知して共有する。 ○健康教育、安全教育の具体的な学習内容について改善を図る。 ○学習内容、形態等工夫する。			
	・防災・安全教育の推進	健康・安全部	○前回実施の反省をもとに、避難訓練や児童生徒引き渡し方法を確立させることができつつある。児童生徒及び教職員に対して「自分の命は、自分で守る」学習や指導について意識の向上を図っていく必要がある。	○「自分の命は自分で守る」方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図るとともに、教職員の意識が向上している。	○保健、食育、安全、生徒指導の各分野から児童生徒及び教職員へ情報発信し、理解啓発を行う。			
4 知的障がい教育の専門性の向上・発揮	・特別支援教育のセンター的機能の充実	小学部	○児童を取り巻く状況に応じた家庭や関係諸機関との連携や校内での関係者間との連携を図り、即時にケース会議を設定する体制が整ってきている。	○関係者間及び学部全体で情報共有を行い、気になる事例や問題に対して早期に対応している。	○学部全体で情報を共有するとともに、関係者同士（担任、学年、支援部、SSW、管理職、外部の関係機関等）でスムーズな連携を図る。			
		中学部	○早急な指導・支援をしていくための情報共有の在り方や学部の体制づくりが不十分である。	○報告・連絡・相談のシステムが明確化され、情報共有が素早く行われ、指導・支援に活かされている。	○職員朝会、学部会、学年会、情報共有シート等で、生徒の情報を共有するとともに、関係者（担任、学年主任、支援部、生徒指導、管理職等）で連携を図りながら指導・支援にあたるようにする。			
		高等部	○学部・学年で一貫した早急な指導・支援をしていくための体制が十分できていない。	○報告・連絡・相談のシステムが明確化され、学年・学部としての指導・支援が素早く行われている。	○職員朝会、学部会、学年会、学部掲示板等で、生徒の実態や現状を報告、連絡、相談し合う体制を構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたれるようにする。			
	・チームで取り組む支援	支援部	○センター的機能として、担当の職員を中心に取り組んでいるが、各担当間、校内職員との連携には至っていない。 ○知的障がい特別支援学校としての専門性・基礎的基本的な事柄を職員全体で共有するに至っていない。	○校外支援と校内支援をつなげていくことで相互理解を図り、センター的機能が充実する。 ○「専門性を高める研修」や「15分研修」を充実させることで、基礎的基本的な専門性を高める。	○複数体制で校外支援を行い、内容等は「支援部だより」等で校内に情報を発信する。 ○特別支援教育研修会を行い、地域の小中学校等の教育相談につなげる。 ○研修に参加しやすいように、内容や時期を検討する。 ○専門性向上に向けての意欲が高まるよう情報発信に努める。 （ちらし・学部回覧等による啓発、アンケートによる評価、情報共有）			
5 業務改善の取組	○生活時程・学校行事・研修会等の見直し ○長時間勤務者の解消	学校全体	○児童生徒の事態の応じた生活時程や行事のあり方を考えていく必要がある。 ○記録等に係る資料作成、教材研究、授業準備等に充てる時間が限られている。	○行事、会議等がいくつか削減されている。 ○指導と準備等に当てる時間のバランスが取れている。	○今年度新しくした分掌組織の内容について適宜点検する。 ○学習や行事等の準備に過剰なものがないかの点検をする。 ○時間外業務時間の多い者の実態把握と解消に向けた検討をする。			

評価基準 A: 十分達成 [100%]
 B: 概ね達成 [80%程度]
 C: 変化の兆し [60%程度]
 D: まだ不十分 [40%程度]
 E: 目標・方策の見直し [30%以下]